2013年　秋のバス旅行

（三保の松原　日本平）

11月20日

昨年、富士山の五合目と忍野八海に行き、随所に現れる美しい富士山に魅せられた。その後ユネスコの世界遺産に登録されたこともあって、今年の秋は「三保の松原」で再び美しい富士を眺めようということになり目的地がきまった。

わがOPCの会員31名の乗りこむバスが、東名高速道路に入るとすぐに、車窓に美しい雪の富士が見えてきた。ガイド嬢曰く、「どんなにお金を出しても、お天気は買えないから、これ以上贅沢な旅行はない」とのこと。わたくしたちは昨年も、今年もこの上ない好天に恵まれたので、その言葉の魔術にかかり、この上なく幸せな気分となって、車窓に出没する富士に喝采を送った。

バスが相模湾を過ぎ、伊豆半島の根元を通るときの富士は、頂上の剣ヶ峰が左端にきている。いつも思うのだが、その角度での富士は、実にくっきりとして美しい。それを「伊豆の富士」と私は名づけて眺めているが、まさに期待通りであった。そして再び左手に海が見えてきたら、そこはもう駿河湾である。

バスは清水港を通り、三保の松原へ着いた。誰かが「ワァー！龍がのたうっているみたい！」と叫ぶのが聞こえた。全くその通りである。松が磯馴れの姿のまま大木になったからであろうか。中でも特に見事な松を「羽衣の松」と称し柵で大きく囲ってある。ご存知、迦陵頻伽（かりょうびんが）の声とともに天人の舞う美しい羽衣伝説は、この三保の松原の白砂青松の景色がなくては生まれなかったであろう。

（迦陵頻伽とは、人頭・鳥身の想像上の鳥。妙なる鳴き声を持つ。）

そこから、日本武尊がこの山の頂上へ登り、四方を眺めたという日本平へ向かった。そこでは富士が、手に取るような近さで迫り、中腹の雪が斑になっているのが、ありありと見えた。子供のころ、この富士山を見たことはないのに、この景色の通りに富士山を描いたのだから不思議だ、などと妙なことを考えてしまった。それは多分どこにでもある銭湯の壁の絵のせいかもしれない。そのため富士山のイメージは頭の中に焼き付いており、日本人の老若男女すべてにとって、信仰にも似た憧憬の山となっているからであろうか。そして今、日本晴れの日本平の頂上で、銭湯の壁ではない実物の富士と対峙しているのだ。まさに得難い３６０度の解放されたパノラマ空間である。それこそが、ここまで来たという喜びであった。

話題の桜海老が駿河湾でしか獲れないので、お楽しみのお昼のご馳走は桜海老のオンパレード、鍋もお寿司も海老入りである。

そこからロープウエイで、久能山東照宮へと下った。ロープウエイだから登るのかと思ったら、下ったのである。やはり日本平は高いところにあるようだ。眼下に駿河湾がひろがり、苺のハウスが、ぎっしりと並んでいた。灘には紫紺の潮目がくっきりと見え、沖は薄い冬霞がかかっていた。実に穏やかな心の癒される風景であった。

冬霞む灘に紫紺の潮目見ゆ

帰り道に旧東海道宿場町である由比の本陣を見学、蒲原の町並を車窓見学させてもらい、東海道宿場町の今昔や、ゆかしい歴史を垣間見る事ができた。

蒲原という地名を聞くと、広重の「東海道五十三次」の雪の景色が、頭に泛ぶ。この温暖な地域に雪景色とは、と不思議に思った。この旅行を記念して改めてネットでその絵を見てみた。構図がすぐれているので、心に残ったのであろうか。

バスは時間どおりに蒲田につき、皆様とねぎらいの挨拶を交わして帰途についた。楽しい一日であった。幹事の中里さま、肝いり役の永田さま、まことにありがとうございました。　　終わり

（新倉記）

自句自解

十二月の句

新倉けい子

底冷えに水の音して坊厨

平成十年十二月、高野山へ詣でた時の句である。そこは「八葉の峰々」と呼ばれる千メートル前後の山々に囲まれた真言宗の霊地である。坊には出家して間もない若い僧たちがいて膳を運んだり寝具を整えたりしてくれる。さすが若い男子のこととて膳を五重塔のように重ねて悠然と運び込んで来る。挙措も作法に従って正しく、まことに爽やかである。日が落ちればやはり霊山のふところ、しんしんと底冷えしてくる。そして厨の方からは水仕事の音が聞こえ、高野山の夜は更けていったのである。

十年以上も前のことながら、句帖とはありがたいもので、この句の出来た前後の様子も、同時に作った句を読めばありありと思い出すことが出来る。しかも日記や写真より内容を濃く思い出すことが出来るから嬉しい。以下二句はその時の句である。

短日や高野の店の早じまひ

坊泊まり越き行火に足擦へ